

南無根源!

—松下幸之助の宗教観

谷口全平

序

宗教学者の島蘭進氏は「宗教Ⅱ修養的な経営者としてもっとも名高いのは、松下電器の創始者、松下幸之助（1894-1989）であろう」と記している。それが、「宗教Ⅱ修養的」といえるのかどうか分からなけれど、確かに松下は資金、人材、設備や組織など目に見える要素だけではなく、熱意、意欲、思いやりといった目に見えない要素を大事にする経営者であった。

「物心一如」という言葉をよく使った。物と心とは本来一体のもの、またそうでなければならぬという信念を持っていた。例えば、販売においては、商品の上に心を載せて売る、そして代金の上に心を載せていただく、物が動くと同時に心も動く、そこに販売の醍醐味、喜びがあるというのである。製造においては、心の高まりがなければよい製品はできないという考え方であったし、経営、経済においても、心の面、つまり道徳が高まらなければ効率のよい活動は生まれない、だから「道徳は実利に結びつく」のだと、道徳の大切さを訴えていた。

また松下はさまざまな宗教とかかわっていた。松下家はもともと浄

土真宗西本願寺派の門徒であった。けれど、浄土真宗だけではなく、真言宗、禅宗、神道、天理教、大本教、金光教、弁天宗、キリスト教、創価学会、立正佼成会等々との幅広い付き合いがあった。しかし、どの宗教の信者にもなっていない。

松下は、なぜ一つの宗教の信者にならなかったのか、また、宗教に対してどのような思いを持ち、どのようにかかわってきたのか、それをまとめておくことがこの論考のテーマである。

精神文化と物質文化との調和

松下と宗教とのかかわりを語るとき、まずあげなければならないのは、昭和七年の天理教本部への訪問であろう。このことに関しては松下自身さまざまなところで語り、記しているが、おおよそ次のようなことである。

信者であった得意先店主の熱心な勧めにほだされて、天理教本部を見学するが、その繁栄ぶり、また信者の人達の生き生きと喜びをもって奉仕している姿に驚くこととなる。そして、問題の多いみずからの業界と繁栄の姿を呈する宗教との違いに思いを致す。

精神文化と物質文化が調和した形で進まなければ、人間の本当の繁栄も平和も幸福も生まれては来ない。その心の面を宗教が受け持ち、物の面を産業が受け持っている。よく考えれば、宗教は「多数の悩める人々を導き、安心を与え、人生を幸福ならしめることを主眼として全力を尽くしている聖なる事業である。われわれの業界はまた人間生活の維持向上のうえに必要な物資の生産をなし、必要かくべからざるこれまた聖なる事業」ではないか。

宗教と産業は車の両輪のようにどちらも必要なものである。そうであるのに心の方の製造元は繁栄し、物の製造元はさまざま問題に悩んでいる。それは、宗教は人を救うという強い信念でやってきたが、商売人は儲けさせてもらうという通念でやってきた。その使命感の違い、信念の違いに両者の開きが出てきた原因があるのではないか。産業者もそのみずからの仕事の意義をしっかり自覚しなければならぬのではないか。

そう考えた松下は、同年五月五日に全店員を大阪・堂島の中央電気倶楽部に集め、「われわれの使命は生産に次ぐ生産により、物資を無尽蔵にして貧を克服し、楽土を建設することである」と松下電器の真の使命を明らかにするのである。

当時、経済界は昭和四年の世界恐慌以来の不景気が続き、労働争議もたびたび起こっていた時代である。松下は、産業の停滞は、使命感の弱さにあり、「われわれの事業こそもつと繁栄しなければならぬ聖なる事業」であることに思い至ったのである。

精神文化と物質文化の調和ある発展、それは第二次世界大戦後、松

下が起こしたPHP運動においても大いに主張されたことである。

宗教の低調と心の貧困

終戦の一年後、昭和二十一年十一月三日、松下は世と人のあるべき姿を衆知を集めて研究するためにPHP研究所を創設し、活動を起こした。PHPはそのとき作ったスローガン「Peace and Happiness through Prosperity（物心一如の繁栄によって平和と幸福をもたらそう）」の頭文字を取ったものである。戦後のしばらくは、食べるに食糧がなく、住むに家がないというような混沌とした状況であった。そのような中で悩み苦しむ人々を見て、「万物の霊長と言われる人間がどうしてこれほどまでに苦しまなければならないのか。人間には本来、繁栄、平和、幸福を招来する能力が与えられているはずだ」という人間に対する疑問と、「社会がよくならなければならないことで活動する企業の発展もないし、人々の幸せもない」ということの実感、それが設立の動機であった。

松下は研究所設立から年末までの二カ月間に四十数回、翌二十二年には二百四十回ほどの講演や懇談を重ね、みずからの思いや願いを訴えている。その中で特筆すべきは松下が宗教の興隆を大いに期待し、そのことを訴えていたことである。昭和二十二年五月、西本願寺でも僧侶の人々を前に一門徒としてこう語っている。

「現在ほど宗教が低調な時代はないと思うのであります。心の貧困が生じたということも、一つは戦争に負けて物資が非常に足りなくな

ったために起こる心の荒みだと思えますが、一つはやはり心を豊かにする教え、その教えが非常に低調であるということが影響していると思うのであります。いわゆる宗教の低調が、心の貧困を招来しているという大きな原因の一つではないかと思うのであります。それで、PHPを実現するには、どうしても宗教の方面を真に興隆しなければならぬ。しからば宗教の興隆が、PHPの研究、運動自体においてできるかという点、できないと思えます。どうしても宗教教団のお立場におられる方々の決起にまたなければならぬ、かように実は考えたのであります。それで、心のは、どうかして宗教が興隆するように、われわれは信者の立場からまた国民の立場からこれに努力をして、同時に宗教家の立場におられる方々に、さらに努力していただかなければならないという結論に立ちいたったのであります。私は、この運動を始めてから、宗教家の方々にこのことを申しあげまして、PHPを実現すること国民としてご協力願いたい、ご参加を願いたい、同時に宗教家としてのお立場によって、宗教の興隆にいちだんとご奮闘を願いたいと、信者の一人として心からお願ひしているのであります」³

同じ趣旨の話を東本願寺でも行なっているが、PHP研究所に残された所史、並びにPHP友の会会員向けに発行されていた『PHP新聞』を見ると、昭和二十二年一月から八月までをとっても、次のような動き方をし、宗教関係者に働きかけをしている。

PHPの願いの一つは宗教の復興

一月十六日、第一回修養研究会を飯島幡司博士⁴を迎え、「宗教」をテーマに開催。同十九日、奈良にある天理教見学。同二十四日、第二回修養研究会を「道徳科学」のテーマで開催。

二月十八日、大阪キリスト教会の指導者たちと懇談。

三月十四日、高槻仏教連合会会員と懇談。同十六日、枚方台鏡寺にて枚方仏教団員と懇談。同二十八日、東本願寺にて講演。

四月十三日、高槻尊重寺にて講演。同十四日、高槻市仏教会会場にて高槻大冠仏教会会員に講演。同日、高槻正証寺にて講演。同十九日、相国寺長得院にて宗教家、教育家、実業家と懇談。同日、高槻西澄寺にて講演。同二十日、西本願寺にて同寺幹部と懇談。

五月十日、西本願寺にて講演。同十二日、第一回宗教講座（キリスト教）を開催。同二十六日、第二回宗教講座（仏教）を開催。同三十一日、東本願寺派茨木別院にて懇談。

六月六日、京都聖護院にて講演。同九日、第三回宗教講座（キリスト教）を開催。同十日、光善寺で講演。

七月一日、第四回宗教講座（仏教）を開催。同八日、第五回宗教講座（キリスト教）を開催。同二十二日、第六回宗教講座（仏教）を開催。

八月十二日、第七回宗教講座（キリスト教）を開催。同十六日、第八回宗教講座（仏教）を開催。同二十九日、第九回宗教講座（仏教）

を開催。

また翌二十三年四月五日には西本願寺大谷光照門主と対談、「もつと強く宗教を主張する必要があるではありませんか。もつと積極的に働きかけねばならないではありませんか」と迫っている。さらに、二十四年三月十三日にはNHKの仏教講座の時間で「私の信仰」と題して、「PHH運動の狙うところの一つは宗教の復興でありまして、仏教といわずキリスト教といわず、すべての宗教が正しい形において十分に受け入れられなければ、決して人々は幸福になれないのであります。そしてこれを基礎として物質文化が進み、科学と宗教が一体となって発展していくところに、真の繁栄平和が生まれてくると信じているのであります」と訴えている。

松下がPHH活動を始めた頃に宗教に期待し、要望していたことをその発言からまとめると、おおよそ次のように要約される。

- ① 経済を中心とする人間の物的生活、宗教を中心とする精神的な生活、この二つが人間生活の大きな二つの分野である。従って、物も大切だが心も大切。そのために宗教の興隆をはかり、心の安心を求めねばならない。
- ② 宗教の興隆がなければ真の繁栄もない。
- ③ 宗教心を心に蔵し、それに立脚した生活態度を打ち立てねばならない。
- ④ PHHの立場で宗教を普及したい。
- ⑤ 現在の既成宗教には時代性が欠けている。日に新たにしなければならない。

人々の心の導きとなり、精神文化をつくる基となるためには、教義が、そしてその宗教のあり方が、一般の社会よりむしろ一歩進んでいなければならない。

⑥ お互いわれわれも素直な心で正しい宗教を受け入れることが大切である。

⑦ 正しい教えに基づく正しい宗教的躰が必要である。

話は本論からいささかそれるが、私がPHH研究所に入所し、真々庵で『PHH』誌の編集の仕事を行っていた昭和四十年、禪の研究者、鈴木大拙博士から、「PHHはPeace and Happiness through Prosperityで、この繁栄なるものは物心両面にわたること。しかし、考えてみると物のPと心のPとは相容れぬものがある。物のPではいつでもプラスで、いやが上に積み重ねてゆけばよいのであるが、心面はむしろその反対のマイナスで、貧なればなるほどよいのである。Peace and Happinessは、物面のプラスに反比例してなかなか手に入らぬが、心面のマイナスは常にHとPが伴う。それで、Peace and Happiness through Povertyと続けた方が分かるようだ。PHHの諸君以て如何となす」といった意味の手紙をいただいたことがある。これに対してどのような手紙を返したのか覚えてはいないが、松下は物の繁栄と心の繁栄は決して矛盾するもの、反比例するものではなく、調和がはかれるもので、そのときに幸福が得られるのだという信念を持っていた。そこに、宗教家と実業家の違いを見るのである。

宗教は人間の幸せのためにある

松下は人間には食欲や性欲という本能が与えられているように、信仰本能という何か頼ろうとする本能的な感情が与えられていて、そこから神や仏やその他のものを信じ、これに頼るといふ営みが生まれてくるのだと考えていた。その信仰本能を満たすのが宗教である。だから、宗教はその信仰本能を正しく満たすことが大切で、宗教はあくまで人間の幸せに資するものでなくてはならないと次のように言う。

「正しい宗教というものは、人間に奉仕するというか、お互いの日々の生活をより高く、よりゆたかなものにし、この世に真の繁栄、平和、幸福を生み出す一つの基盤となるものだということである。実際、そういうものでなければ、宗教の意義はないと言っても過言ではないであろう。その意味では、たとえば過去に幾多見られた宗教戦争のように、宗教のためにお互い人間が相争うといったことがあつてはならない。宗教はやはり、あくまでも人間のためのものであり、宗教のために人間が犠牲になるといふようなことは決して許されないと思う。そしてそのためには、それぞれの宗教は、その形はどうであれ、その根本においては恒久不変の真理に立脚しなければならぬし、しかもその時代時代にふさわしい説き方、教え方がなされなければならぬ」

松下が商売を始めて十年ほど経った頃のこと。このようなことがあ

った。

いちばんたくさん買ってくれるお得意先に大野という人がいた。松下より十歳ほど年上で、奥さんを亡くした後、再婚をした。その奥さんがある新興宗教の信者で、主人も奥さんに誘われ、その宗教に熱を入れた。そしてその宗教のお坊さんの勧めで、店の前にお地藏さんのお堂を建てることになった。ところが、一人で建てるのではなく、多くの人の協力を得て建てた方が靈験はさらにあらたかになるといふことで、松下のところにも寄付要請があつた。お得意先でもあるし、松下は三十円ほどの金を寄付したのだが、そうこうするうちにまた大野氏がやって来て、「あなたは体が弱いのは信仰心がないからや。ぜひ信仰しなさい。うちの坊さんに会いなさい」と強く勧める。松下もその熱心さにほだされて、「それじゃまあ来てもらつて下さい」ということになった。

その坊さんはやって来て、強圧的に「こうしなければあなた、体がますます悪くなりますよ」と言う。最初は大事なお得意先の勧めでもあるので、「はい、はい」と聞いていた松下であつたが、その言い方が度を越していると感じ、こう言つた。

「あなたの言うことは一面よく分かるけれど、僕はそういう気にはなれません。あなたの言うことはいい面もあるけれど、自分で得心がでない面もありますから、しばらく考えさせて下さい」

大野氏は信仰のことで息子と喧嘩をして、息子は家を飛び出し、店はしばらくして倒産した。原因は大野氏夫妻がその宗教に入れあげたこと、また取引先にまで強引に勧め、取引先から嫌われたことであつ

た。

松下はこのようなエピソードを昭和三十七年四月のP H P研究会で若い所員に話しているが、松下は宗教でも、教育でも、あるいは経済や政治でも、すべては人間の幸せに資するものでなければ意味がないと考えていた。また言い方を変えれば、われわれ人間がすべてを人間に資するものになければならない、またそうすることができるのが人間である、と考えていたのである。

松下電器の守護神について

松下は、明治二十七年、和歌山県の和佐村で、八人兄弟の三男末っ子として、浄土真宗西本願寺派の門徒の家に生まれている。父親は小地主で、長屋門のあった大きな家には白龍はくりゅう大明神だいめいじんを祀る祠ほらがあったという。⁸龍神は水を司る神である。⁹農家であっただけに、そのあたりの家では祀られていることも多かったであろう。民間信仰の一つである。

大正七年三月七日、大阪市北区（現福島区）西野田大開町に松下電器器具製作所を開設したときに守護神として白龍を祀った。昭和八年に本店・工場を門真に移しているが、白龍大明神も移ってきている。

昭和九年までは白龍大明神だけであったが、事業部制や分社制が敷かれてから、昭和十年、松下電工に黒龍大明神、同十一年、松下電器電極工場に青龍大明神、自転車工場に赤龍大明神、豊崎工場に黄龍大明神が初めて祀られた。



松下電器本社の一隅にある白龍大明神を祀ったお社。龍神の印、三鱗みつうろこ紋が刻まれている

現在松下グループでは本社、電化関係、旧九州松下電器は白龍、旧松下電子工業、旧松下産業機器は黄龍、旧松下電池工業は青龍、自転車事業部は赤龍、松下電工グループには黒龍、旧ラジオ事業部をはじめ音響関係事業場、電子部品、旧松下通信工業などには下天龍王かみあめりゅうおう、松下が昭和十四年に建てた居宅、西宮の光雲荘には善女龍王ぜんにょりゅうおうが祀られている。現在も各地の各事業場に合計百三十余の社があるのである。

松下は昭和三十七年四月のP H P研究会で、次のように語っている。「各工場、営業所にはみなその分身を祀ったわけや。（本社は）白龍さんやからね、赤龍としてみたり、黒龍としてみたりして祀っているわけや。これはまあ加藤大観さんの指図によってやったわけですわ」加藤大観氏は、昭和十二年から同二十八年二月に八十四歳で亡くなるまで、松下の側において松下の健康長寿と松下電器社員の安全息災、

そして会社の発展を祈って、朝夕二時間の勤行を一日も欠かさなかった真言宗醍醐派の僧侶である。

松下と加藤氏の出会いは、大正十二年、松下が開発した砲弾型自転車ランプについて、山本武信商店と大阪府下の一手販売契約を交わしたときに始まる。そのとき加藤大観氏は山本武信氏の顧問をしていたのである。その後、同十四年、松下はランプの全国販売権を山本氏に譲渡するが、販売上の意見が合わず、翌十五年に買い戻している。従って加藤氏と会う機会もなくなったが、昭和五年頃に松下は加藤氏のことを思い出し、加藤氏の京都の庵を訪ねた。そのときから加藤氏は松下の相談相手となる。

昭和十二年十二月、加藤氏の「松下さん、あなたが承知してくれるなら、私はこの庵を閉鎖してしまいたい。そして、一生あなたについて、あなたの健康と会社の発展を祈ろうと思うのだがどうだろうか」という申し出に、当時松下が住んでいた京都の家（河原町今出川）に加藤氏夫妻を招き、約二年間共に暮らしている。加藤氏六十八歳、松下四十三歳のことである。

その後同十四年、西宮に松下の居宅、光雲荘が完成したのを機に、松下は加藤氏を会社に招聘。そのときから加藤氏は創業以来の守護神「龍神」の祭司となり、社運の興隆と安全祈願に専念することになった。

現在守護神の祭司は加藤氏から数えて四代目となり、中山観好氏が受け持っている。祭司は真言宗醍醐派の僧侶の資格を持った松下電器の社員である。中山氏によれば、さまざまな龍神を配置したのは仏教

の五大思想¹²⁾によっているのではないかと言う。つまり、「事業部制という考え方に仏教の五大の思想を投影させて白龍大明神を中心に、青、黄、赤、黒の各龍神を配置したものと考えられます」と言うのである。下天龍王は五大思想とは離れて、音に関係があるので音響関係の部門に配し、善女龍王に至っては清瀧権現として加藤氏が修行した醍醐寺の守り神でもあるため、それを松下邸に祀ったのではなからうか。松下本人が言っているように、守護神の配置については加藤氏の考え方が多分に反映されていると言えよう。

天祖大神を祀る

第二代祭司河野真養氏を引き継いだ第三代祭司高味清秀氏は、「参拝者自身が神の心を体して自分の心が神の胸に入り、神の御心がわが胸に入る（入我我入）即ち神と自分が一体となって過去を反省し未来への奮起心を呼び起こした時に守護神祭典は立派に経営に参画し得ると申せましょう」「その事業場のトップに立つ人がよく参拝なさって敬虔な祈りをお捧げになる所は従業員の参拝者の数も多く、その事業場の経営はスムーズに好成績を挙げておられます」と記している¹³⁾。

松下が松下電器の守護神として白龍をはじめとする龍神を祀ったのは、高味氏の言うように敬虔な気持ちで仕事に当たりたい、また従業員にも当たってほしいという思いがあったからであろう。

しかし、昭和十四年、西宮光雲荘に善女龍王を祀ったときのこと。松下は龍神を祀るだけではどうも物足りなく思ったという。そこで、

みずから考えた天祖大神という神様を祀っている。天祖とは天の祖、文字通り大宇宙の創造主といった意味であろう。そして、毎朝、拍手を打ち、「天祖大神の御前にかしこみかしこみ申し候。日にちのお導きありがとうございます。本日もどうぞよろしく願います」と拝んだというのである。

松下は晩年、「人生の八〇パーセントから九〇パーセントは運命によって決まっているのではないか」と言っていた。いわば波乱万丈の人生を歩む中で、神の領域とでも言うか、人知の及ばない何か大きな力を感じてきたのであろう。

PH P活動を始めてから、PH Pの考え方を「PH Pのことば」としてまとめているが、そのいちばん初めに発表した「繁栄の基」という「ことば」は次のようなものである。

「限らない繁栄と平和と幸福とを、真理は、われわれ人間に与えています。

人間が貧困や不安に悩むのは、人知にとらわれて、真理をゆがめているからであります。

お互いに素直な心になって、真理に順応することに努め、身も心も豊かな住みよい社会をつくらねばなりません」（昭和二十三年二月発表）

松下は真理を、自然の理法、宇宙の意志等とも言っている。真理は繁栄、平和、幸福を人間に与えている。つまり、「大部分は自然の力によって仕組みられ、裏づけられているのではないかと思うのであります。すなわち人間がみずから考え、そして働く部分は、全体から見れ

ば百分の一、二百分の一であって、大部分は自然によってすでに仕組みられ、裏づけられていると思うのであります。それを人間が少しずつ探し求めていくにすぎないのであります」。だから、人知にとらわれず真理、自然の理に従っていけば、おのずと繁栄、平和、幸福は得られるのだと言う。

PH P研究所を創設したとき、「天地自然の中に繁栄の原理を究め、進んでこれを社会生活の上に具現し、以って人類の平和と幸福とを招来せんことを期す」という綱領を定めた。それは、大自然にすでに仕組みられている繁栄の原理を探究して、それを社会の上に適用し、繁栄、平和、幸福をもたらそうというものであった。

昭和三十六年八月、松下は松下電器の社長を辞し会長に就任したのを機に、会社再建のためしばらくおろそかになっていたPH Pの研究を再開するため、京都東山山麓に真々庵を設けた。真々庵の名称は真理を探究する場という意味でつけられたが、その庭の一角に、翌三十七年、「根源こんげんの社やしろ」を建設している。根源とは文字通り宇宙の根源であり、万物の創造主と言ってもいい。光雲荘に祀った天祖大神と同じ趣旨のものである。松下も、「最初は天祖大神と言うたけれど、大神と言うことはいかん、やっぱりPH P研究の考え方でやらないかん」ということで根源ということになった」と語っている。

根源の社は昭和四十二年、PH Pの新ビルが京都駅前にできたときにも建設されているし、同五十六年、松下電器の本社の前に「創業の森」がつくられたときに、その一角にも建立され、現在その三つが存在している。



真々庵、「根源の社」の前で

創業の森の「根源の社」の前には、その設立趣旨が次のように簡潔に記されている。

「宇宙根源の力は、万物を存在せしめ、それらが生成発展する源泉となるものであります。

その力は、自然の理法として、私どもお互いの体内にも脈々として働き、一木一草のなかにまで、生き生きとみちあふれています。私どもは、この偉大な根源の力が宇宙に存在し、それが自然の理法を通じて、万物に生成発展の働きをしていることを会得し、これに深い感謝と祈念のまことをささげなければなりません。

その会得と感謝のために、ここに根源の社を設立し、素直な祈念の

なかから、人間としての正しい自覚を持ち、それぞれのなすべき道を、力強く歩むことを誓いたいと思います」

私が真々庵で仕事をしていた頃、松下は真々庵に来ると、何よりもまず最初に根源の社にお参りをした。神式に二礼二拍をして、手を合わせ祈った。時には藁の円座を敷き、その上で座禅を組み、手を合わせて、しばらく瞑想にふけていた。

松下は何を祈っているのかと問われて、「感謝と素直」だと言っていた。感謝については、根源の力によってみずから生かされていることを強く感じていたからであろう。素直については、人間というのは、ともすると本能や感情、あるいは過去の体験などさまざまなことにとらわれて、自然の理を見失いがちである。だから、何にもとらわれない素直な心で理に従っているかどうかを自省していると言うのであった。

大宇宙、大自然の根源の力は自然の理法、自然の法則を通じて万物に生成発展の働きをしている。人間には根源の力からその法則を解き、万物を生かし、生成発展の大業を営む使命、役割、能力が与えられている。「人間は、たえず生成発展する宇宙に君臨し、宇宙にひそむ偉大なる力を開発し、万物に与えられたそれぞれの本質を見出しながら、これを生かし活用することによって、物心一如の真の繁栄を生み出すことができる」¹⁸⁾能力を持つのである。その能力は人間だけに与えられているのであり、そういう意味で松下は「人間は万物の王者」だと言う。けれど人間は時に自然の理を見失い、往々にして争いを起こし、貧困に陥り、不幸になっていく。

そうならないために、根源に対する感謝と何にもとらわれない素直さを祈っていたのである。

松下は、昭和二十四年十一月に発表した「PHPのことば その二 十三 信仰のあり方(二)」では次のように記している。

「天地の恵みは、何の分け隔てもなく、われわれ人間に燦々として降り注いでおります。それはあまりに広大なために、無心のごとくに思われませぬ。

この恵みの根源には、万物を生かし人間を生かそうとする宇宙の意志が大きく働いております。この大いなる宇宙の意志を感得し、これに深い喜びと感謝をもち、さらに深い祈念と順応の心をささげることが、信仰の本来の姿であります。

われわれがこの信仰に立ったとき、宇宙の意志がいきいきと働いて、ものを生み出す知恵才覚が湧いてまいります。そこから力強い労作が生まれ、繁栄への道がひらけてまいります」

人間は神をも創った

「私は、人間というものが偉いものやと思うのは、自分の発想で神様というものを創造するわけですな。その創造した神さんに手を合わして拝んでいる。それで知恵を授かる。知恵を授かって自分が成長する。成長した知恵をもって、より高き神さんをつくる。そしてそのより高き神さんをまた手を合わして拝む、そして自分も成長させる。そういうようにして、だんだん内容の充実した円満具足の神さんを、わ

れわれは今創造しつつあるわけですわ。そういうことができるのが人間である。自由自在に神をつくっているのが人間ですわ。だから私は「人間は万物の王者や」ということを本に書いたんです」⁽¹⁹⁾

現在の宗教では、人間は原罪を負っている、人間は罪業深重の凡夫である等と説かれているが、松下は人間は大きな使命を負った偉大な存在であるとした。また、それだけに「すべての物事に対して、責任を持たなければいかんということです。万物の生成発展に寄与することは、人間が天命として与えられているんだから」と言うのである。

松下は、「いかに今までの宗教に数多くの真理が含まれているとしても、それだけで真理の全面を掩うことは誤りだと思えます。つまり、祖師の教えを以て、これで真理のすべてが解明しつくされたと考えるのは、いささか、かたよった考えではないかと思うのであります。真理は限りなく広く、限りなく深いもので、まだまだ解明しつくされない面がたくさんにあると思えます。すなわち、今までの教えに、尊い真理の数々が含まれているとしても、それはまだ真理の一面にすぎないのではないかと思います」⁽²⁰⁾と云う。

思想でも宗教でも、あるいは人間の知恵でも完全なものはない、全面の真理はない。だからさまざまな思想があつていいし宗教があつていい。それらの中から人間の繁栄、平和、幸福に資するものを、何にもとらわれない素直な心で取り入れればよいのである。知恵にしても、自分ひとりの知恵にとらわれず衆知を集めれば、より高い知恵になっていく。もし、あらゆる人の知恵が融合調和されれば、神の知恵にも等しくなると考えていた。

松下にとって正しさとは人間の幸せにつながることであり、それはつまりまだ解明し尽くされていない「真理」「自然の理法」に従うことであつた。

さまざまな宗教とかかわりながらどの宗教の信者にもならなかったのは、どの宗教も全面の真理ではなく一面の真理に過ぎないと考えていたところに原因があるのではないか。みずからは、全面の真理ともいべき根源の社をつくり、根源に感謝の祈りをささげるとともに素直な心になって理に従っているかどうかを自省し、真理を探究していたのである。

松下は、靈魂の存在を信じていた。しかしそれは個々に存在するのではなく、溶鋳炉のいわば鉄のようなものだと考えた。溶けた鉄は白熱に輝いているが、それがいろいろな形になってあらわれる。鋳や鎌や鍋やら、いろんなものに形づくられ、用を果たし終えるとまた溶鋳炉に帰って一体化する。靈魂も、鉄が溶鋳炉に帰るように「大宇宙の懷」に入ってしまう、つまり人間は宇宙の根源から出て、また宇宙の根源に帰ると考えていたのである。だから、「靈魂が宇宙根源の力に帰納し一体化するなら、まあ墓は建てても先祖代々のもの一本でいいわけやな。それすらも必要ないな。それやったら宇宙根源の神様というか、根源の力というものを祭れば、同時にそれは自分の親の肉体、親の魂を通じてそこへ行つておるのやから、全部祭ることになるな。非常に経済的ですね」とも言うのである。

「南無阿弥陀仏」という念仏は阿弥陀仏に帰一することである。そういう意味では松下の考え方からすれば、唱え言葉は「南無根源」と

いうことになるのかもしれない。

根源の社の前でじっと手を合わせ、静かに祈っていた松下の姿が浮かび上がってくる。

【注】

- (1) 「現代日本の経済と宗教」『東洋学術研究』第三十一巻第一号、東洋哲学研究所、平成四年二月。
- (2) 松下幸之助「私の行き方考え方」P H P 文庫、昭和六十一年、二九〇頁。
- (3) P H P 講演懇談会、昭和二十二年五月十日、西本願寺にて。P H P 総合研究所研究本部「松下幸之助発言集」編纂室編『松下幸之助発言集 第36巻』P H P 研究所、平成四年、一六六頁。
- (4) 経済学博士。朝日新聞論説委員、朝日放送社長などを歴任。カトリック教徒として日伊親善に尽くす。草創期のP H P 活動に尽力した(一八八八—一九八七)。
- (5) 『P H P 新聞』昭和二十三年五月十五日、P H P 友の会本部。
- (6) 『P H P 新聞』昭和二十四年四月十五日、P H P 友の会本部。
- (7) 「九十にして、いまだ和顔、和言に至らず」『財界』昭和六十年臨時増刊四月十日号、財界研究所。
- (8) 古倉弥太郎『松下電器の守護神を尋ねて』昭和五十六年。遊津孟氏の「発刊に寄せて」による。
- (9) 龍は梵語で naga (ナーガ)。インド神話で、蛇が人格化した人面蛇身の半神。大海や地底に住み、雲雨を自在に支配する力を持つ

